

浜松の陸軍基地

荒川章二

「浜松の戦争史」と私

私は、二〇年ほど前に静岡大学にやってきました。浜松ではなく、静岡市のキャンパスで仕事を始めましたが、その時に、この公開講座でも講師をされる竹内先生が、戦争遺跡によって戦争史を語るという本を作れないかと投げかけてきて、お手伝いすることになりました。その会は、「静岡県近代史研究会」といいますが、私はその事務局長を務めることにもなったため、出版社を探して本をまとめる役目を担うことになり、こうしてできたのが『史跡が語る静岡の十五年戦争』という本です。一九九四年のことです。

この本が出てから、各県で戦争遺跡のガイドブックが発行されました。戦争の痕跡を示す遺跡の写真を載せて、概要を記した上でそこへの行き方を紹介するという基本形は、

どこも踏襲しています。最近では、県レベルではなく、もっと細かい地域レベルでも行われています。竹内先生は、その後も引き続き精密な調査を続けています。

私自身が初めて本格的に静岡の軍事史に取り組んだのは、『静岡県史』でした。私はもともと政治史が専門で、軍事史とは何の関係もなかったのですが、軍事史もできるだろうというところで軍事史の担当にさせられました。『静岡県史』では専ら軍事史と政治史を担当し、資料編四冊、通史編二冊の計六冊に関わっています。『静岡県史』に関しては、戦前の軍事史について私がほとんど担当しています。敗戦間際については次回の講師である村瀬先生にお願いしました。

『静岡県史』をベースにして、近隣の豊橋の軍隊の動きや富士の演習場の問題なども総合して、静岡県という地域から軍隊あるいは軍事史がどのように見えるのかという視点

でまとめたのが、『軍隊と地域』という本です。

最近関心を持っているのが「浜松まつり」です。近くの方はご存じだと思いますが、かつて浜松まつりの時に和地山公園で凧あげをしていましたね。和地山公園は、戦前は練兵場でした。歩兵第六十七連隊の練兵場を借りて、凧あげ祭りをしていたわけです。当時は浜松まつりという名前はありませんでしたが、和地山の会場でおこなっていた凧あげが、その後、浜松まつりへと変わっていくのです。浜松まつりという名前が出るのは戦後のことです。いずれにしても、浜松まつりの凧あげは軍隊と非常に深い縁を持っています。

浜松の戦争史とは、このようなところで接点があるということになります。

今日は、明治から一九四〇年（昭和一五）くらいまでの地図を見ながら、浜松の軍事施設の拡大と変化について、改めて地図で視覚的に確認してみようと思います。

十 第二次大戦生活史の発掘

最近、近現代の戦争遺跡の保存・活用に関する関心が高まり、県単位での戦争遺跡ガイドブックや、考古学的方法（戦跡考古学）による調査報告が刊行されるようになっていきます。

戦争遺跡というと、広島の実験場や長野の松代大本営の地下壕が有名です。また、沖縄の南風原町の陸軍病院壕は、二〇〇七年から公開されて実際の壕に入れるようになりました。南風原町は、那覇の南東方向にあります。ここには陸軍病院が大規模に作られていました。有名なひめゆり部隊をはじめとする女学生の医療部隊の最初の配属地になったところです。壕中は非常に暗い状態で、懐中電灯を持って入ります。

このような有名な戦争遺跡がありますが、それだけでなく、日本の中にはどの市町村にもいろいろな戦争関係の構造物や遺構があります。このような近代の戦争、特に第二次大戦期を考える手がかりは、比較的身近に残されているため、そこから多くのことを知ることができます。

たとえば、自治体史や町内会ごとの地域史などを仔細に見ていくと、戦争の話が多く出てきます。そのようなものも参考になります。戦争遺跡のガイドブックなどであたりをつけて、地図を片手に遺跡が残る現地に実際に足を運んでもいいでしょう。現地で地元住民の話を聞くと、貴重な証言を得られることもあります。現地を確認した後、研究論文や『戦史叢書』、関係部隊史などに当たってより深く調べたり、かつての写真や地形図で当時の状況を確認したりすれば、戦争遺跡は確たる歴史の証言者に生まれ変わります。

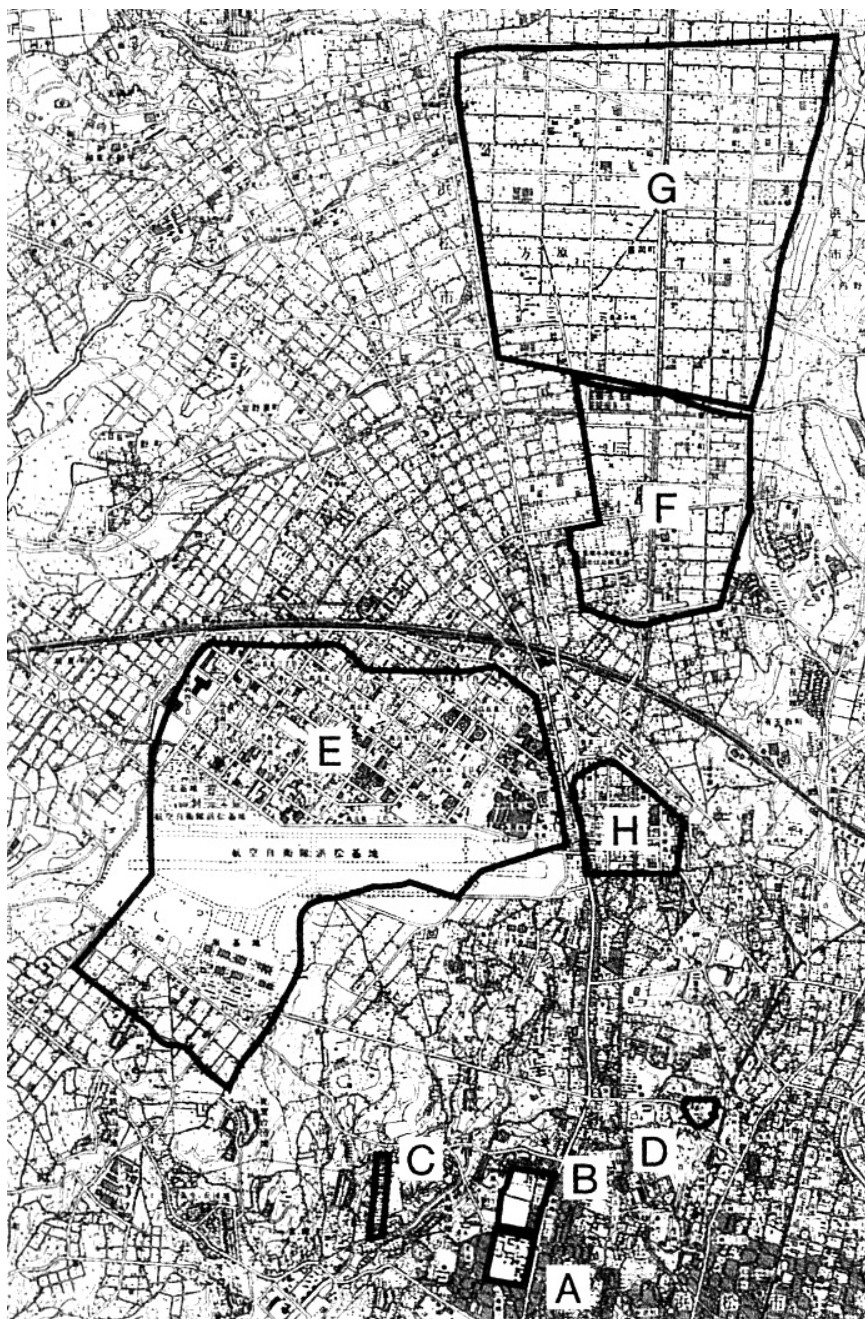


図1 戦争遺跡地図／荒川章二「第二次大戦生活史の発掘―地域の戦争遺跡を探る」より

戦争の時代が臨場感を持って迫ってくるだろうと思います。

浜松歩兵第六十七連隊

十浜松の軍事施設の誕生

一九〇七年（明治四〇）、静岡大学浜松キャンパスがある場所には、歩兵第六十七連隊の兵営と練兵場が誕生しています。これは浜松地域に最初にできた本格的な軍事施設です。一九〇七年は、日露戦争の後になります。日本の軍事拡大は、まず日清戦争準備で進んでいき、日清戦争が終わった後、日露戦争の対策として次の軍拡が始まります。そして日露戦争時に軍隊が大きくなり、それを定着させる形で日露戦後にさらに軍事拡大が進んでいきます。歩兵第六十七連隊ができたのは、まさにちょうどこの時期にあたります。

ちなみに静岡の歩兵第三十四連隊の場合は、日清戦争後にできています。日清戦争の後にできた歩兵連隊は第四十八連隊までですから、第四十九連隊以降が日露戦争後にできたこととなります。そのような形で、当時の浜松町に本格的な軍事施設が誕生したということになります。

ただし、それまでに浜松に軍隊がいなかったわけではなく、軍隊の演習場として使われることもありました。しか

し、浜松の町中あるいは近隣に部隊ができたのは、歩兵第六十七連隊が最初ということになります。

十浜松の戦争遺跡の概観

図1は、現在の浜松市の地図です。静岡大学浜松キャンパスはAの場所です。高射砲連隊時代の砲廠が、工作技術センターとして現在も利用されています。Bに歩兵連隊の練兵場がありました。現在は和地山公園になっています。Cには実弾射撃場があり、Dには陸軍墓地がありました。Eの中央部には飛行第七連隊の飛行場、西側に爆撃演習場が設置され（「浜松陸軍飛行場」と総称）、現在は航空自衛隊浜松基地になっています。浜松陸軍飛行場の南端部には浜松陸軍飛行学校が設置され、重爆撃の専門教育と航空戦術研究が行われました。

日中戦争が始まった頃から、新たな爆撃場や飛行関係の軍事施設が北に向かって広がっていきます。浜松陸軍飛行場の北東部は三方原村でしたが、村の大部分が三方原飛行場として使用され、Fが部隊所在地と飛行場、Gが爆撃場となりました。Hには第一航測連隊（通称「中部一三〇部隊」）という、機位を失った航空機誘導の専門部隊がありました。G、F、Hが、日中戦争以降拡大する施設で、今回の話はこのあたりのことになります。

十 進出する軍事施設

「遠江国敷知郡浜松町全図」(図2)は一八九五年(明治二八)の地図ですから、日清戦争の終わった年です。軍隊がまだない時代の地図になります。この時期の町場は非常に狭く、少し外に出ると、畑が広がるという状況です。浜松城の周りにも何もありません。浜松城の北側に家もないという状態になります。このような所だったからこそ、軍事施設が作れたわけです。

同じような時期の地図をもう少し絵図的に示してあるのが「浜松鉄城閣及市街略図」(図3)です。一八九九年(明治三二)ですから、浜松の停車場ができたばかりの頃ですが、周りにはまだほとんど何もありません。

図4は、浜松市の人口の推移を示したグラフです。このグラフを見ると、第一次世界大戦が終わったところから急激に人口が増えていることが分かりますが、実は浜松の特徴は、それよりも前から伸びているということです。たとえば沼津市では、人口が増えだすのは大正時代に入ったところくらいからで、それまでは幕末からほとんど動きがありません。静岡市でもそれほど動きは大きくないと思います。ところが浜松の場合は、大正時代よりも前から人口が増え始めているのです。

それだけ浜松は、織物業を中心として活気があったとい

うことですが、浜松はさらにまちを活性化させるため現在のJ・R浜松工場などの工場を誘致します。工場ができること、大量の労働者がやってきて、多額の予算が投資されるからです。軍隊の誘致もこれと似たところがあります。

十 軍隊の誘致

軍隊はかつてにやって来るのではなく、陸軍などどこに連隊を作るか事前に調べます。ただしそれだけで決めるのではなく、地元の市や町がどのくらい誘致に熱心か、ということが重要になります。その場合の熱心さとは、お金を出すこと、あるいは土地を出すことです。

たとえば軍隊を誘致する時に、浜松と静岡と沼津が手を挙げたとします。それぞれの自治体がお金と土地を用意します。「うちの市はこれだけ用意するから来てくれないか」という交渉をして、軍隊の誘致合戦をします。もちろん陸軍はそれだけで決めるほど単純ではないので、もっと軍事的な必要性を考えながら進出をしていくわけですが、浜松市では、まちの活性化という戦略の一つとして、工場と軍隊の誘致に積極的に関わっていたという側面があります。

つまり、町場の人は軍隊を誘致したいわけです。ところが、訓練場になって被害に遭うことが懸念されるような地域の人々は当然反対します。そのような利害関係の対立がある



図2 遠江国敷知郡浜松町全図（1895年）／『浜松市史 新編史料編二』より

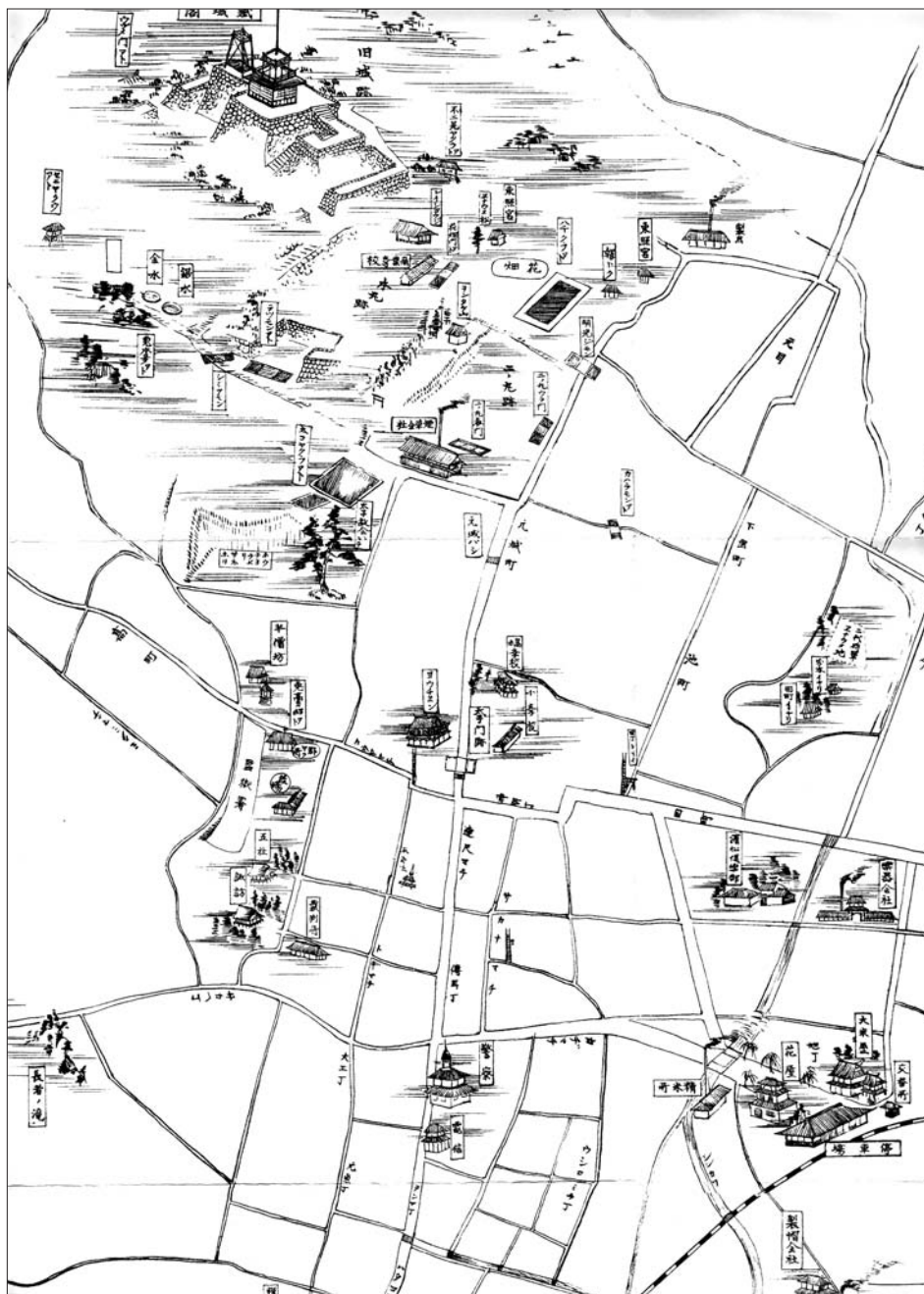


図3 浜松鉄城閣及市街略図（1899年）／『浜松市史 新編史料編二』より

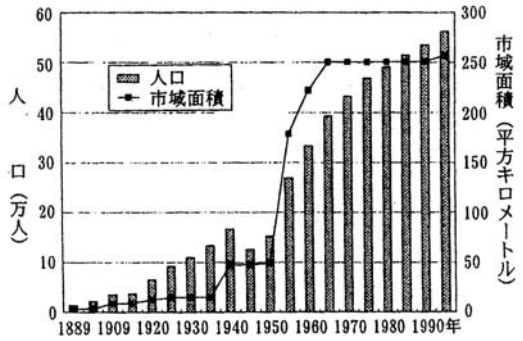


図4 浜松人口グラフ／【中部】 地図で読む百年より

くさんの土産を買います。このようにして入営・退営という儀式が繰り返されていくのです。

一九三〇年（昭和五）の段階で見ると、浜松には二〇〇〇人、三〇〇〇人という人が、この入営・退営の時期に出入りをしています。この時期には、非常に大きな賑わいとなり、土産物屋やその他の商店が潤うことになりました。そのため、軍隊の誘致に積極的になるわけです。

のですが、町場の人が誘致をする一つの要因は、まさに賑わいが出てくるからです。

軍隊があれば、毎年そこに兵隊が入営します。単に入営する人だけでなく、家族や見送りの人たちも来ます。何千人という人が浜松に入ってくるのです。逆に退営して浜松から出ていく人たちは、た

十陸軍墓地

一九一一年（明治四四）の地形図では、歩兵営、練兵場、射撃場、陸軍墓地という軍の施設が見えます（図5）。歩兵第六十七連隊が来て歩兵営ができると、すぐにできるのが練兵場です。歩兵営と同じくらいの規模の練兵場が必要になります。現在の和地山公園の二倍くらいの広さの練兵場です。そして必ず射撃場を作ります。どこの連隊でも必ず射撃場を作り、墓地も作ります。

この墓地には、兵営で勤務している最中に亡くなられた方と、出征して亡くなられた方の両方が葬られます。その後、曖昧になるのですが、基本的に軍人が戦死した場合、陸軍墓地に葬られるのが原則です。将校は自分の家に葬ることが許されるのですが、一般の兵卒は軍人墓地に葬られます。しかし、家族は当然自分の家のお墓に入りたいわけです。その場合は分骨をするか、あるいは兵士の残されたものを少し分けてもらってお墓を作るといったことになります。ただし、それはだんだん崩れていきます。お骨自体が帰って来なくなるからです。

日露戦争の途中くらいまでは一生懸命骨を拾います。ところが、日露戦争でも後半になると、死者がたくさん出てきてお骨を集めきれなくなり、かつ戦争が終わった時に持って来られないという事態が生じます。そうすると、太平洋

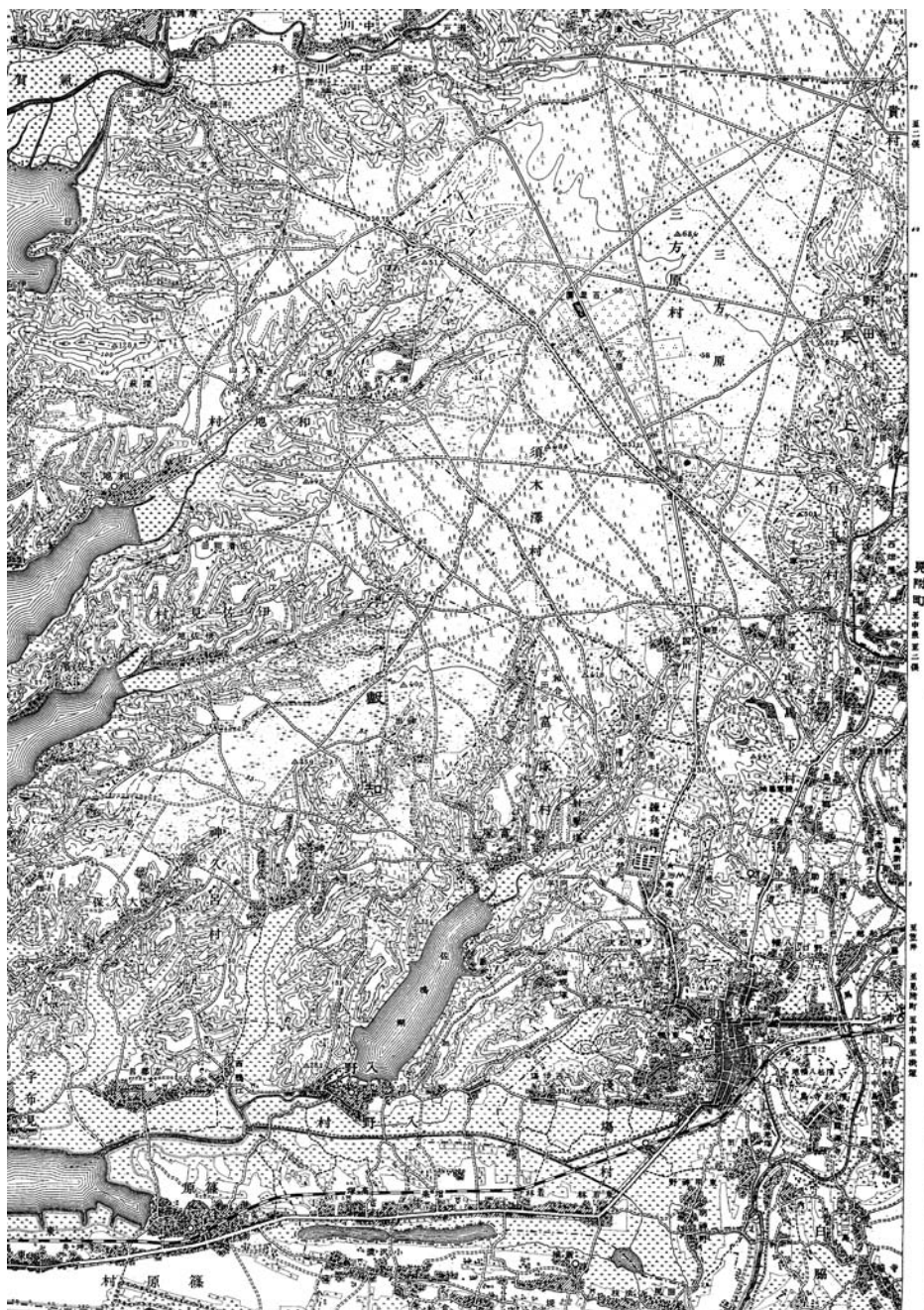


図5 明治四十四年地形図／『浜松市史 新編史料編 三』より



図6 浜松市全図 (1918年) / 『浜松市史 新編史料編三』より

戦争でもありませんが、焼いた骨を持って帰れないので遺髪や爪などを持ってくるようになります。なお、日清戦争の時には、軍人の骨は焼かないで土葬状態です。火葬が許されるのは、日清戦争の最後くらいからです。

十歩兵第六十七連隊の施設

図6の浜松市全図(一九一八年)では、歩兵第六十七連隊の兵舎が並んで建っているのがよく分かります。現在の静岡大学浜松キャンパスの正門とほぼ同じ場所に門があったはず。その東側に「連隊司令部」と書いてありますが、正確には「連隊区司令部」です。ここでは、徴兵制に関わる軍隊の役所のような施設です。歩兵連隊ができると、必ず連隊区司令部ができます。

その南側にあるのは「衛戍病院」、つまり軍人用の病院だと思えます。その東側には線路が通っているのが分かります。これは浜松鉄道(後の遠州鉄道奥山線、一九六四年廃止)です。

図7は歩兵第六十七連隊の正門です。五人ずつ並んで歩いていますが、人が五人並んで通れるだけの幅があったということになりました。静岡大学浜松キャンパスには、和地山公園側にこの絵のような煉瓦造りの門が残っています。建物が奥の方に見え、おそらく左側に兵舎が並んでいたの

ではないかと思えます。

図8の写真では、左側に兵舎が見えます。土塁のようなもので囲んでいることが分かります。右側は衛戍病院です。衛戍病院は道を隔てていますから、中央の道が姫街道ということになります。おそらく浜松キャンパスの敷地の南側のあたりの場所の写真だと思えます。

図9は浜松鉄道のガイドマップのようなものですが、省線の浜松駅よりも離れたところに駅があることが分かります。連隊前駅の手前には兵営の絵があります。飛行連隊はまだできていないようです。



図7 歩兵第67連隊正門／『浜松市史 新編史料編三』より



図8 歩兵67連隊と衛戍病院／『浜松市史 新編史料編三』より

高射砲第一連隊と陸軍飛行第七連隊

図10は、大正初期の浜名郡各村の全面積に対する田および畑の百分率を示した地図です。たとえば、中央にある天王村では、村の全面積に対して田んぼが五九%、畑が二九%ですから、ほとんど開発された土地であることが分かります。

ところが、飛行連隊が進出する三方原村では、田んぼは〇%、畑は九%ですから、開発された土地が非常に少ないわけです。そのような地域に連隊が進出していくということになります。

十高射砲第一連隊の誘致

図11の絵（「浜松市を中心とする名所史蹟交通鳥瞰図」）は昭和初期のものですが、明治の中期に比べると、街がはるかに賑やかになってきているようすが分かります。浜松城址付近までかなり広がりをみせている状態が分かります。この地図では、歩兵連隊が高射砲連隊と飛行連隊に変わっています。

一九二五年（大正一四）に大きな軍縮がありました。歩兵連隊の場合、いくつかの連隊が消えます。歩兵第六十七連隊もそのうちのひとつです。四個師団ですから、一六の歩

兵連隊がスクラップになり、その一つとして、浜松の連隊が消えたわけです。

ところが、浜松の連隊がすべてなくなるのは地域にとって困るといふ要望が出ました。特にその要望を強く出したのが、在郷軍人会でした。そのような要望があり、豊橋にある歩兵第十八連隊という古い連隊の三つの大隊のうちの一つを浜松に派遣駐屯してくれないかという要請を出し、それが受け入れられました。ただし連隊とはだいたい二〇〇〇人弱で

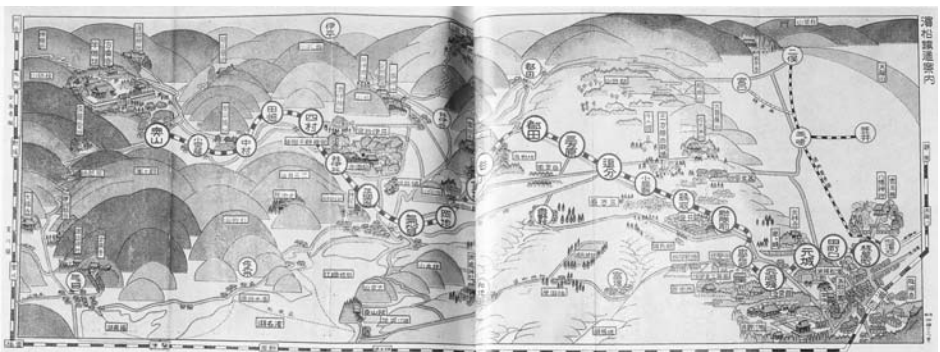


図9 浜松鉄道案内／「浜松市史 新編史料編三」より

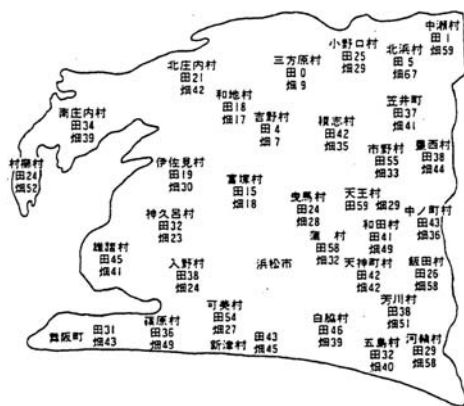


図10 町村面積に対する田畑比率（大正初期）／『浜松市史三巻』より

す。その時期で一八〇〇人くらいだと思えます。そのうちの三分の一ですから、ぐっと減ります。いずれにしても、この静岡大学浜松キャンパスは兵営として残るわけです。

高射砲連隊は豊橋にできたのですが、それを浜松に引張ってきます。これはすさまじい荒業なのですが、なぜ成功したかというと、豊橋でもめたからです。高射砲連隊が活動するには、砲撃ができるスペースが必要です。これ以上、大砲でドンパチやられたのでは、われわれの農業ができません。ということ、農民たちの反対が起こったのです。

渥美半島は農業的にもかなり有望なところですが、今でも非常に豊かな農産物に恵まれています。当時も農業で十分にやっていけたので、別に軍隊がなくてもよかったです。そのために、非常に強い反対運動が起こりました。

その結果、実弾を撃つという演習ができなくなりました。ちょうどそのような時に、浜松側から移ってほしいという要請が来るわけです。浜松では砲撃演習場を米津浜に計画します。すると今度は米津浜の漁民が反対しますが、補償金を積んで交渉し、結局、米津浜を砲撃演習場として確保するという条件で、一九二八年（昭和三）、高射砲第一連隊が浜松に来ることになったのです。



図11 浜松市を中心とする名所史蹟交通鳥瞰図（昭和初期）／『浜松市史 新編史料編四』より

↑高射砲第一連隊の施設

高射砲第一連隊の兵営は、それまで歩兵営だった静岡大浜松キャンパスです。高射砲連隊時代の砲廠は、現在でも工作技術センターとして利用されています。キャンパスの北

東部の角には、ひときわ高い土塁があります。おそらく弾薬庫です。練兵場の大部分は、現在、和地山公園として利用されています。公園の中を気をつけて見ていくと、一九三〇年（昭和五）の昭和天皇行幸時の親閲記念碑があります。

射撃場西側すぐの川沿いには、一九三三年（昭和八）建立の記念碑があります。碑文によれば、飛行連隊設置に伴ってこの地域の北側二キロメートルから三キロメートル以北の竹木が伐採されたために河川が氾濫し、水田被害は五〇余町歩に及び、そのため陸軍に河川改修の陳情を行い一九三一年（昭和六）に完成したそうです。

高射砲連隊には、毎年六〇〇人くらいが入隊してきます。飛行連隊は二〇〇人台です。そうすると、歩兵連隊一個分です。ですから、飛行連隊と高射砲連隊を合わせると、歩兵連隊と同じくらいの人数が、毎年入って来るということになります。

十 飛行第七連隊

その飛行連隊とは、一九二六年開設の飛行第七連隊で、日本陸軍初の重爆撃専門部隊でした。現在の航空自衛隊浜松基地を含む、六五五ヘクタールが飛行連隊の敷地になります。自衛隊基地には、「陸軍爆撃隊発祥之地」とい

う碑があり、連隊の由来が刻まれています（図12）。この連隊は、一九三七年七月、日中戦争に対応して三つの部隊を編成し

て中国に派遣し、その一つ飛行第六大隊（後に飛行第六十戦隊と改称）は、海軍航空部隊と協力して、一九三八年から一九四一年まで、重慶爆撃を実施しました。世界で最も早い戦略爆撃の一つということになります。

飛行第七連隊本隊（後に飛行第七戦隊と改称）は、一九四一年、関東軍特殊演習に参加し、その後インドネシアやニューギニアに派遣され、一九四五年には沖繩戦で雷撃（魚雷）攻撃や特攻作戦（義烈空挺隊）を実施します。

浜松陸軍飛行場の南端部には、一九三三年、浜松陸軍飛行学校が設置されて、重爆撃の専門教育と航空戦術研究を担いました。同校は、一九四四年六月、実戦部隊である浜松教導飛行師団に改編されて、サイパン島攻撃の実施をしています。また、陸軍最初の特別攻撃隊である富岳特別攻撃隊の母体にもなって、フィリピンで特攻作戦を展開しま



図12 陸軍爆撃隊発祥之地の碑

した。

飛行連隊は、パイロットだけの部隊ではありません。ほとんどは地上勤務兵で、飛行機工手、発動機工手、鍛冶工手、電気工手、無線電信工手、写真工手、気象観測工手などとして配属されました。飛行機に搭乗できたのは、下士官と将校だけです。浜松の飛行連隊には三〇〇人弱の兵隊が来るのですが、そのうち飛行機乗りは、入営する兵士の中にはいなくて、将校たちが別途訓練されてここで整備された飛行機に乗るとい形になります。

飛行連隊では、夜間爆撃と長距離爆撃、そして寒冷地へ飛ぶ訓練が重点的に行われていました。寒冷地への飛行は、対ソ連戦が念頭にあったからだと思います。また、海上を飛ぶ訓練も行っています。現在のようにリーダーが発達した時代と違って、たとえば台湾や小笠原、沖縄へ飛ぶというのは難しかったようです。浜松から飛び立って、正確に海の上を飛んで目標地に達するという訓練を何度もやっています。

十地図・写真で見る高射砲第一連隊・飛行第七連隊

このあたりの時期を、地図で確認してみましょう。図13では、練兵場があり、その南側は高射砲第一連隊に変わっていることが分かります。気がついた方がいるかもしれません。

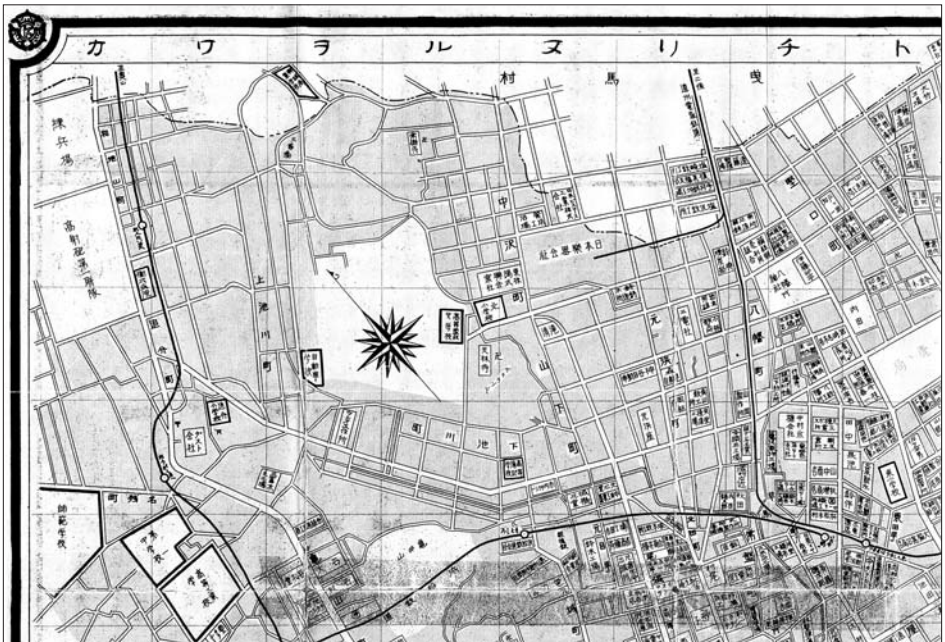


図13 大日本職業別明細図(1934年) / 『浜松市史 新編史料編四』より

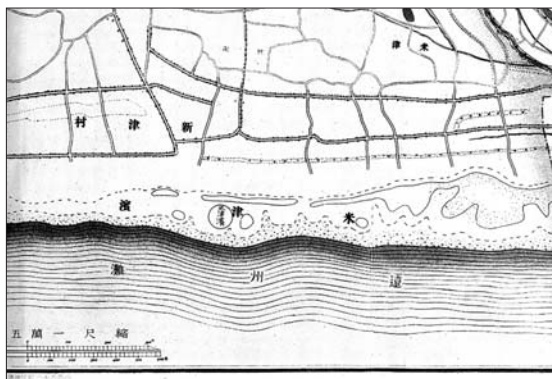


図14 浜松市全図（1939年）／『浜松市史 新編史料編四』より

せんが、この地図からは連隊司令部が消えています。徴兵事務をやるのは歩兵連隊がやるので、高射砲連隊の場合は連隊司令部はいらないのです。ですから、衛戍病院だけが残っています。

図14は、高射砲部隊が演習する砲撃場のある米津浜

です。この海岸から海に向けて撃っていたわけです。この演習は、飛行連隊と一緒にしています。もちろん模擬弾でしょうが、高射砲連隊が飛行連隊の飛行機に向けて打つのです。飛行連隊と高射砲連隊がセットになっているのが非常に都合がいいのです。だから、飛行連隊をここに作るのだから高射砲連隊もよこせというのが、浜松側の言い分だったわけです。

図15は高射砲連隊練兵場の写真で、大正末期のもので

風あげをやっているのが見えます。この写真をみると、練兵場の雰囲気に分かるとは思いますが、かなり広大な場所です。だから風あげには最適だったのですが、陸軍と交渉して五月初めに三日間ほど開放されて、この写真のように風あげをして市民が楽しむということが行われていました。陸軍側にとっては、軍を支持してもらうための非常にうまい仕掛けになっています。

図16は高射砲連隊の営門です。図7と比較すると分かりますが、歩兵連隊時代とは門柱が違っています。おそらく上を塗り固めたのではないと思



図16 高射砲連隊営門／『戦乱のさなかに』より



図15 高射砲連隊練兵場写真（大正末）

います。図17は米津海岸での射撃演習の写真で、一九三五年（昭和一〇）のもので、奥に見えるのは砂丘だと思いますが、砂丘の向こう側に海岸があります。おそらく砂丘の手前側から、砂丘を越えて海岸側に向けて砲撃演習をしている風景だと思えます。



図17 米津海岸射撃演習／『戦乱のさなかに』より

図18は、照空灯と聴音機の写真です。左側は照空灯で、夜間、上空を飛ぶ敵の飛行機を探し出すための照明灯のことで、右側が聴音機で、敵機の爆音を聴いて機種、高さ、速度を推定するための機械です。聴音機や照空灯を操作する部隊を照空隊と呼びました。



図18 照空灯と聴音機／『戦乱のさなかに』より

図19は、豊橋の高師原陸軍演習場の写真です。これは浜松の写真ではないのですが、もともと高射砲連隊があった場所で、ここから追い出されたわけです。現在の愛知大学がある場所が高師原で、ここには師団があったのですが、先ほど言った軍縮で師団が消えます。しかしその後も演習



図19 高師原陸軍演習場／『戦乱のさなかに』より

場は残ります。これは一九三五年（昭和一〇）の写真ですから、この時期には演習が可能になって、非常に広大な演習場になり、浜松の部隊も使用しました。

十浜松基地のかつての姿

ここからお見せするのは、航空自衛隊浜松基地がもともとどのようなところだったのか、そのようすが移された写真です。図20は県有林の写真ですが、このような林野でした。もともとは宮内省が持っていました。その後、静岡県に払い下げます。県に払い下げたのに、陸軍が引き渡せと言い、

県はOKを出すという
経緯がありました。

先ほど図10で見まし
たが、たとえば三方原
村の場合は、畑が開墾
されたのが9%で、田
んぼが0%、つまり全
体の一割しか開墾され
ていない状態でした。
それは実際には図21の
ような景観でした。こ
のような状態だったた
めに、軍が「われわれ
によこしてもいいでは
ないか」という要求を
してきたわけです。

図22は飛行場ができ
た頃の姫街道です。明
治末期の状況とはあま
り変わっていません。
この写真は正統の終わ
りくらいのものです



図21 県有林／『浜松市史 新編史料編四』より



図20 県有林／『浜松市史 新編史料編四』より



図23 浜松鉄道／『浜松市史 新編史料編四』より



図22 姫街道／『浜松市史 新編史料編四』より



図25 爆撃場／『浜松市史 新編史料編 四』より



図24 追分と飛行連隊／『浜松市史 新編史料編四』より

が、松が生えています。姫街道の松は古いということが分かります。図23は浜松鉄道です。蒸気機関車が走っているようですが分かります。

図24は、追分のあたりです。姫街道がくの字型に曲がっているのが分かります。右側の奥に建物が連なっています。これは飛行連隊の隊舎ではないかと思えます。図25は三方原にできた爆撃場を描いた絵です。手前の鉄道は浜松鉄道です。すぐ近くで爆撃の演習をしているわけですから、事故がない方が不思議なほどの距離でやっているのが分かります。

図26はかなり珍しいと思うのですが、飛行連隊の図面です。燃料庫、地下タンクが書き込まれてあり、右側には兵舎が並んでいます。材料廠や将校の集会場もあります。弾薬庫は左上の方に見えます。また、右下にはプールがあります。飛行連隊は待遇が違ったのかも思えます。ここでおもしろいのは航空神社です。昭和になると、各部隊に神社を作ります。船であれば、船内に艇内神社といわれる祭壇場を作ります。この図面でも航空神社が確認できます。

図27もかなり珍しい地図です。日中戦争後くらいのもので、文字と記号が書き込まれています。「監的」という名前もいくつか見えますが、これは爆弾の観測をする棟がある所

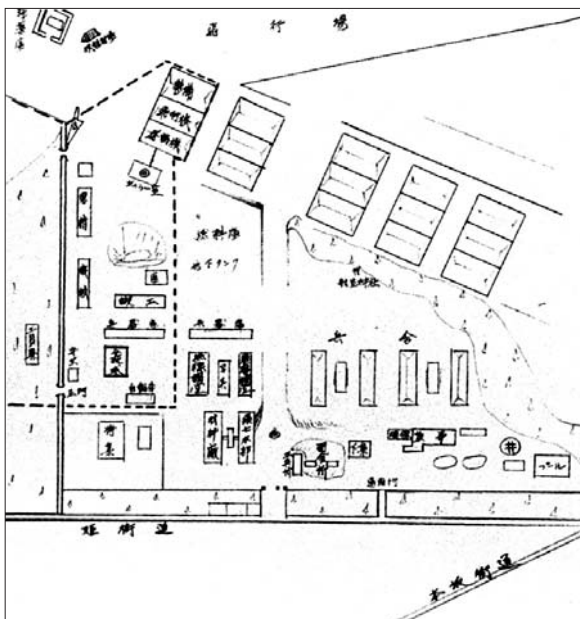


図26 飛行連隊図面／『浜松市史 新編史料編四』より

です。このような施設は普通の地図には書かないのですが、それが書き込まれている地図です。何か特別な要請があったから作られた地図が発見されたということだろうと思います。図28も同じ地図ですが、米津浜のところに「飛行高砲射撃場」と書いてあります。おそらく飛行学校と高射砲部隊の共同の射撃場がここにあったということだと思います。

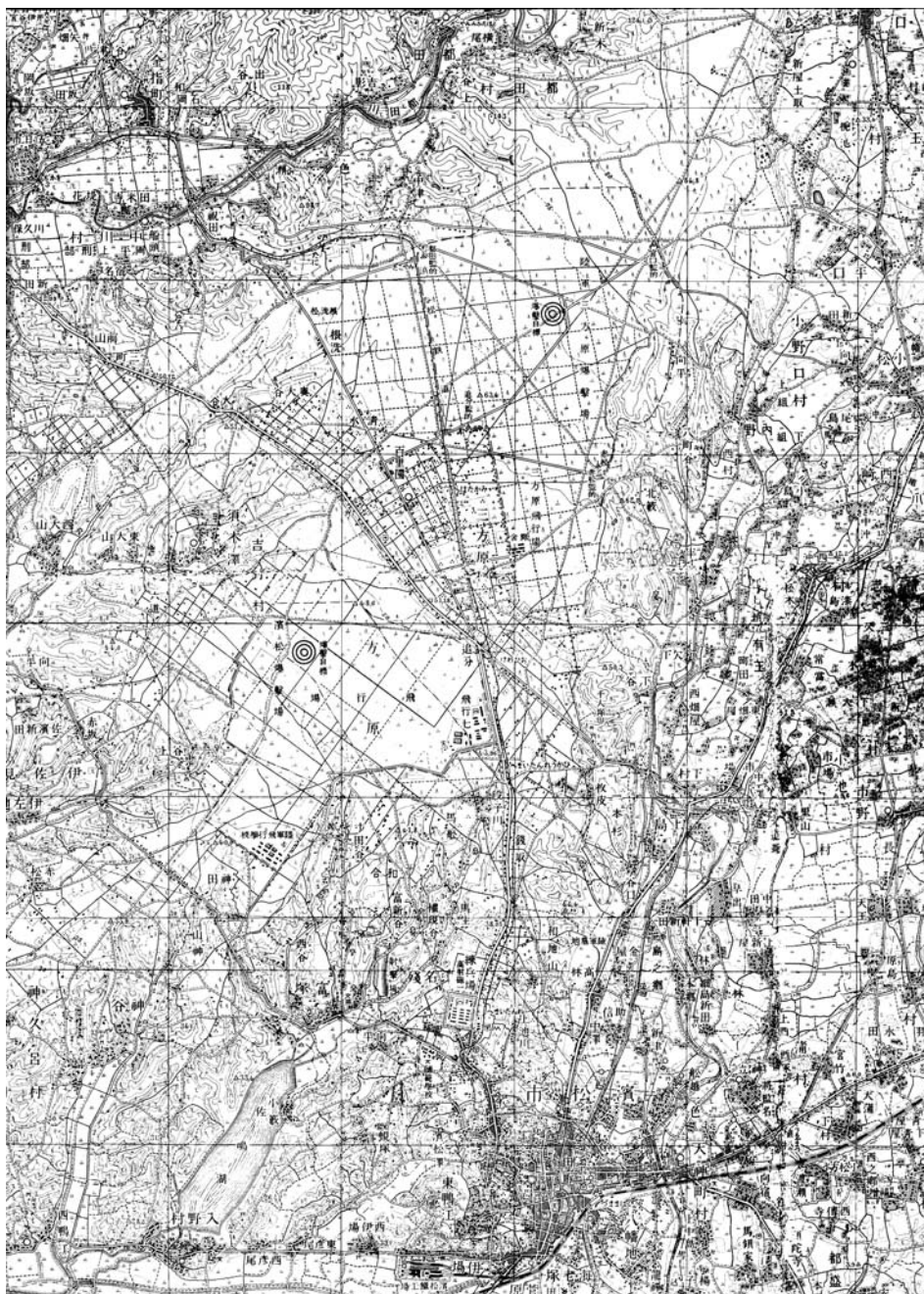


図27 軍事施設入地形図／「浜松市史 新編史料編四」より



図28 軍事施設入地形図／「浜松市史 新編史料編四」より

軍都・浜松への変貌

一九二五年から一九二八年にかけて、浜松市は日本陸軍の現代化を象徴する新しい軍都に変貌しました。日本陸軍最初の重爆撃部隊である飛行第七連隊、最初の高射砲部隊である高射砲第一連隊は、先端科学の粋を集めた施設として市民に迎えられています。

実は、当時の浜松では、軍国主義に対する批判的感情が強く、特に歩兵連隊的な古い部隊や、前線に出て死んでいく確率が高い部隊に対する拒否意識が非常に強かったのですが、最新鋭の技術を持った部隊がやってきたことによつて、浜松の市民はかなりの歓迎をするようになったのです。特に当時は、飛行機を初めて見る人がほとんどでしたから、飛行連隊に対する歓迎は非常に大きかったようです。

飛行連隊や高射砲連隊の場合、在當時に当時まだ希少価値の自動車運転技術を習得する機会があり、除隊後に再就職する場合大きな強みとなりました。不況下の就職難の折、この面でも市民をひきつける魅力を持っていたということになります。飛行連隊が来たことによつて、軍隊に対して拒否から歓迎へとという世論の変化を作っていく、そのような中で浜松は軍都になっていくのです。

その挙句の果てに、浜松は猛烈な空襲を受けるといふ結

果にもなるわけですが、いずれにしても、この時期に軍都に大きく変わっていったのです。

参考文献

- 鈴木博詞『戦乱のさなかに―「野戦防空隊」一士官の記録』
一九七〇年（私家版）
- 浜松市役所『浜松市史 第三卷』一九八〇年
- 静岡県近代史研究会編『史跡が語る静岡の十五年戦争―静岡県の戦争史跡ガイドブック』青木書店、一九九四年
- 平岡昭利・野間晴雄編『中部 1 地図で読む百年―愛知・岐阜・静岡・山梨』古今書院、二〇〇〇年
- 荒川章二『第二次大戦生活史の発掘―地域の戦争遺跡を探る』（木村礎・林英夫編『地方史研究の新方法』八木書店、二〇〇〇年）
- 荒川章二『軍隊と地域』青木書店、二〇〇一年
- 浜松市『浜松市史 新編資料編二』二〇〇二年
- 浜松市『浜松市史 新編資料編三』二〇〇四年
- 浜松市『浜松市史 新編資料編四』二〇〇六年